広汎性発達障害児における社会状況認知、ならびに対人関係に関する障害の様相を評価する心理検査の開発

河内美恵[(1)(2)]・北道子[(1)]・石井智子[(2)]・楠田絵美[(3)]・福田英子[(2)]・福田智子[(2)]・森田美加[(2)]・庄司敦子[(2)]・伊藤香苗[(2)]・田中景子[(2)]・藤井和子[(2)]・上林靖子[(2)(4)]
[(1)]国立精神神経センター精神保健研究所・[(2)]まめの木クリニック・[(3)]江東区教育センター・[(4)]中央大学

<要　旨>

本研究は、自閉症の基礎障害を説明した Frith(1989)の「中枢性統合」の障害という視点に立ち、誤信念課題、ならびに奇妙な物語テストを通過する広汎性発達障害児の社会状況認知、ならびに対人関係認知の様相を把握する心理検査(ストーリーテストⅠ)の開発を行うために、一般健常児の場を読む能力(状況認知)、ならびに周囲の他者の心情を理解する能力(感情認知)の様相を集団式検査にて調査した。今回はテスト中の1ストーリーに関してのみの報告となったが、一般健常群では、ある行動を社会的に見て「全く、変ではない(奇妙ではない)」、あるいは「変である(奇妙である)」と判断するか否かについては多少のばらつきが見られたが、その理由付けに関しては文脈にそぐわないものは少なく、社会的にみて妥当なものが多いということが示唆された。また行動評定に際しての理由付けの内容を学年ごとにまとめたところ、その内容に発達的推移が見られた。一般健常児の状況認知、ならびに感情認知の発達的推移が把握できたことによって、今後、広汎性発達障害児の状況認知、ならびに感情認知の特徴について比較検討することが可能となったといえる。

<キーワード>
ストーリーテストⅠ、心の理論、状況認知、感情認知、広汎性発達障害

【はじめに】

「心の理論」とは、ある行動を了解したり予測したりする方法として、自分自身や他者に特定の精神状態(たとえば、信念、欲求、意図など)を帰属させる健常児の能力を意味する(Baron-Chohen、1993)。この能力の獲得により人は他者の行動を解釈・予測することができるとされている。Baron-Cohen ら(1985, 1986)は、自閉症児・者にはなんらかの原因でこの能力が欠けているために対人関係上の障害、コミュニケーション上の障害、想像力の障害を抱えていると考えた。

子どもが他者の心的状態を理解しているか否かを明らかにする課題(誤信念課題)を世界では初めて考案したのは Wimmer& Perner (1983)であった(マクシ課題)。その後、より実施が簡便な「サリーとアン」課題(Baron-Chohen、1985)、筋書きを伴わない「スマーティー」課題(Perner et al.,1989)などが開発され、広く知られている。

「心の理論」研究においてその中心となってきたのは、子どもが何歳ごろになると誤信念課題を通過できるようになるか、といった「心の理論」の発達に関する研究であった。現在までに多くの研究が行われた結果、一次の誤信念課題(他者の誤った信念に関する理解)は4、5歳～6歳の間に、二次の誤信念課題(他者の誤った信念に関するさらに別の他者の理解)は6、7歳～9歳の間に達成できるようになっていくことが明らかとなっている(Baron-Cohen, 1985 ; Wimmer&Psrner, 1983)。

そして Baron-Cohen(1989)は自閉症では「心の理論」の発達が遅れているために対人関係が障害されているとと考えた(発達遅滞説)。しかし一部の自閉症者はこれらの課題を通過し、他者の心情を予測できるといったことも示されてきている(Baron-Cohen, 1985;Happe, 1995;Bowler, 1992)。

Happe(1994)は、人間の正常なコミュニケーションを理解するためには話し手のことばの奥の話し手の意図した意味を探すことが重要となる、と指摘し、「心の理論」課題を通過する有能な一部の自閉症者の対人関係障害を反映できる「心の理論」高次テストとして“Strange Stories Test”(「奇妙な物語テスト」)を考案した。このテストは9つのストーリーからできており、日常的なコミュニケーションでよく用いられるような比喩や冗談、嘘、皮肉、といった字義通りではない他者の心情を状況から理解できるか否かを測っている。

Happe は、年少の一般健常群、一般成人健常者群、精神遅滞群、自閉症者群に対して課題を実施し、「心の理論」課題(一次、二次)ならびに高次の「心の理論」課題である「奇妙な物語テスト」はそれぞれ妥当性のある課題であること、そして自閉症者が対象群に比べて心の理由付けをすることが有意に少なかったことを主張している。そして Happe は、Frith(1989) の「中枢性統合(central coherence)」の障害、すなわち自閉症者は「文脈の中からさまざまな情報を統合して意味を読み取ること」に障害がある、という立場から考察を加え、「心の理論」テストすべてを通過する自閉症者ですら心の状態に関係する特徴的な不適切な誤りをするという事実は心の状態を想定する能力の欠如のみでなく、中枢性統合の障害が自閉症においてはより普遍的で持続的な障害であることを示していると主張した。

しかし依然として自閉症群の中にすべてのテストに通過する優れた一群が存在していることも同時に明らかとなった。そのため Happe は、最も能力の高い自閉症者が有すると思われる社会的な知識を、日常生活場面で<応用すること>の障害をはっきりさせるために、より自然なストーリー構成で、特徴的な要素に注目を向けるような検査質問をする必要があると考察している。

1974 年 Dewey, M. によって考案された「社会的常識テスト」は、高機能自閉症のある青年の対人場面における認知特徴を理解しようという目的で作成されたテストである。ごく平凡な社会的やり取りのなかに異常な関わりが混じった 8 つのストーリーから成り立っている。

Dewey(1996)は大学生の一般健常群と同年齢の高機能自閉症群にこのテストを実施し、結果を比較したところ、一般健常群は平凡な行動をノーマルと、異常な行動を奇妙と応えており、その理由付けについても他者の心情を配慮した妥当な内容であることが分かった。一方、高機能自閉症群は異常な行動をノーマルと判断するだけでなく、平凡な行動を奇妙と感じることがあるということ、各理由付けについては一人一人異なり、集団に共通して予測できる回答はないが、社会的相互作用に通常の意味を持たせることができない、すなわち社会的に見て妥当なものが少ないという点では共通していた、と報告している。

以上の調査は試行的に実施されたものであり、論文としては未発表なものである。しかしその報告から、「社会的常識テスト」課題が誤信念課題、ならびに奇妙な物語テストを通過する優秀な自閉症児の真に場を読む能力(状況認知)と周囲の他者の心情を理解する能力(感情認知)の様相を把握するための有用な課題となる可能性が示唆されていた。

Happe の「奇妙な物語テスト」の場合、各物語の中で登場人物の目の前に示されている物的な事実や登場人物の心情は話者の字義通りの意味と明らかに異なっていた。そのため「～が言ったことは本当ですか」という設問の答えが「うそ」と判断できる自閉症児にはこの問いがヒントとなって「なぜそういったのだろう？」ということを考えるきっかけとなり、正当に至る可能性が推測される。また、

Sparrevohnら(1995)やHappe(1995)も指摘しているように、言語能力が高いものほど誤信念課題を通過しやすい。言語性IQが高い自閉症者の場合、過去の経験や慣用句の学習などの積み重ねにより、日常的なコミュニケーションでよく用いられるような表現に関してその話者の意図を理解する力をある程度身に付けることが可能なのではないかということが推測される。

一方、「社会的常識テスト」の場合、ストーリーは平易な表現からなっており、被験者は字義通りに登場人物の行動を理解することができる。ストーリー中に示されている行動そのものだけを取り出した場合、明らかに奇妙と感じられるような行動は含まれておらず、また、その場においてある行動が「奇妙か否か」の判断に対してヒントとなるような明確な情報は示されていない。そのため、真に場を読む能力(状況認知)と周囲の他者の心情を理解する能力(感情認知)が求められるものになっている。よって「中枢性統合」という視点から見ると、「社会的常識テスト」は奇妙な物語テストより高次な課題である可能性が考えられた。

そこで河内ら(2005)は、本テストの日本における自閉症児・アスペルガー障害・特定不能の広汎性発達障害児への臨床的有用性を検証することを目的として調査を行った。DSM-Ⅳの診断基準にそって自閉症・アスペルガー障害・特定不能の広汎性発達障害と診断された子ども(PDD群)とAD/HD・学習障害・精神遅滞・神経症・健常児と診断された子ども(非PDD群)の2群に対し、「社会的常識テスト」の翻訳版に若干の修正を加えた「ストーリーテストⅠ」を作成し、個別面接法にて実施した。その結果、PDD群と非PDD群ではそれぞれの行動をノーマルか奇妙かという評価に有意な差は見られなかったが、PDD群の理由付けは社会的に見て妥当さに欠けたものが多く、PDD群には物事の独特な捉え方や判断基準に基づいて他者、ならびに状況を理解・判断している子どもが多いことが示唆された。しかしこの研究はあくまでも臨床群間における比較であり、広汎性発達障害児の日常生活場面における状況認知、ならびに感情認知の特徴を把握するためには基準となる一般健常児群との比較が不可欠と考えられた。

そこで本研究では、日常生活場面における一般健常児の状況認知、ならびに感情認知の様相を把握することを目的とし、以下の調査を実施した。

【調査対象、方法、ならびに調査時期】

(1)調査対象

対象は、東京都の公立小中学校の通常学級に通っている児童・生徒241人(男児126人、女児115人)である。被検児の年齢は8歳から15歳(小学校3年生から中学校3年生)、平均年齢11.09歳(SD=2.03)であった。

(2)方法

調査は集団式にて実施した。「社会的常識テスト」の翻訳版に若干の修正を加えた「ストーリーテストⅠ」を既に作成し、予備的調査として臨床群を対象に使用している(河内ら,2005)。今回は、予備調査の結果を踏まえて8つのストーリーの中から4つのストーリーを選択し、課題となるストーリーと解答用紙が一体となった調査用紙(「ストーリーテストⅠ(集団式)」)を新たに作成し、用いた。検査者が各ストーリーを読みすすめ、登場人物の行動が各文脈において「どのくらい変(=奇妙)と思うか?」4件法(「A:全然、変じゃない行動」～「D:すごく変な行動」)で回答を求め、「そう思った理由」についてもあわせて記入を求めた。

「そう思った理由」付けに関しては、まず、第一に、理由付けの内容に関する発達的推移を把握するために、理由として挙げられた内容によってコーディングを行った。妥当性を図るために、コーディングは2人のスタッフが別々に行い、一致したコーディングをその回答の最終的なコーディング分類とした。不一致となった回答に関してはさらに別のスタッフを加え、複数のスタッフにより話し合い

の上で最終的なコーディングを決定した。次に理由付けが妥当なものであるのか否かを評価した。理由付けが妥当でないものとしては、ストーリーの事実関係を誤解している場合や登場人物の発話の内容についての推測が不適切な場合などがそれにあたる。理由付けの内容が2つのコーディングに該当する場合もあったが、それぞれが妥当なものである場合、複数回答として処理した。行動評定と一致する理由付けと不一致な理由付けを挙げている場合、行動評定の理由付けとして適切な内容の方を採用した。

(3)調査時期

調査時期は、2006年5月であった。

【結果】

調査当日は、本検査に先立ち、他者の心的状態を理解しているか否かを明らかにする課題である「サリーとアン」課題(Baron-Chohen、1985)を実施した。「サリーとアン」課題の一次課題を通過し、かつ、なぜそのように思ったかという問いに対して正当な記述を行うことができた児童・生徒は209人(87%)(男児102人、女児107人)、年齢は8歳から15歳(小学校3年生から中学校3年生)、平均年齢11.20歳(SD=1.99)であった。

これ以降の分析は、「サリーとアン」課題の一次課題を通過し、かつ、なぜそのように思ったかという問いに対して正当な記述を行うことができた児童・生徒209人を対象に行った。

現時点で、すべてのストーリーの自由記述に対して分析が完了していないことから、今回は、「公園で」というストーリーについてのみ報告する。

①「正常・平凡な行動」行動に対する評定、ならびに理由付け

「公園のベンチに座って、昼食に食べているサンドイッチをちぎってハトに与える」という「正常・平凡な行動」に対して、「A:全然、変ではない」と評定した児童・生徒は157人(75.1%)であった。一方、「B:少し変」「C:かなり変」「D:すごく変」と評定した児童・生徒はそれぞれ37人(17.7%)、11人(5.3%)、4人(1.9%)、合計52人(24.9%)であった(表1)。学年別の数値を表2に示す。

表1:「鳩にサンドイッチをあげる」(平凡な行動)に対する行動評定(全体)

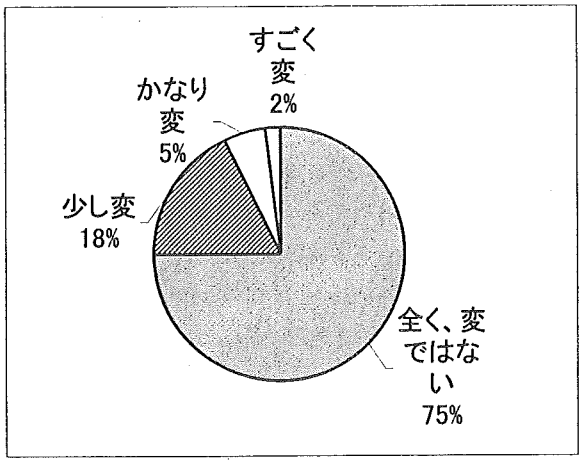
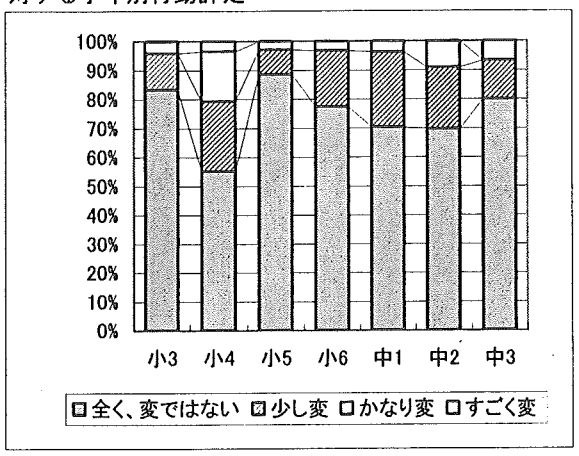


表2:「鳩にサンドイッチをあげる」(平凡な行動)に対する学年別行動評定



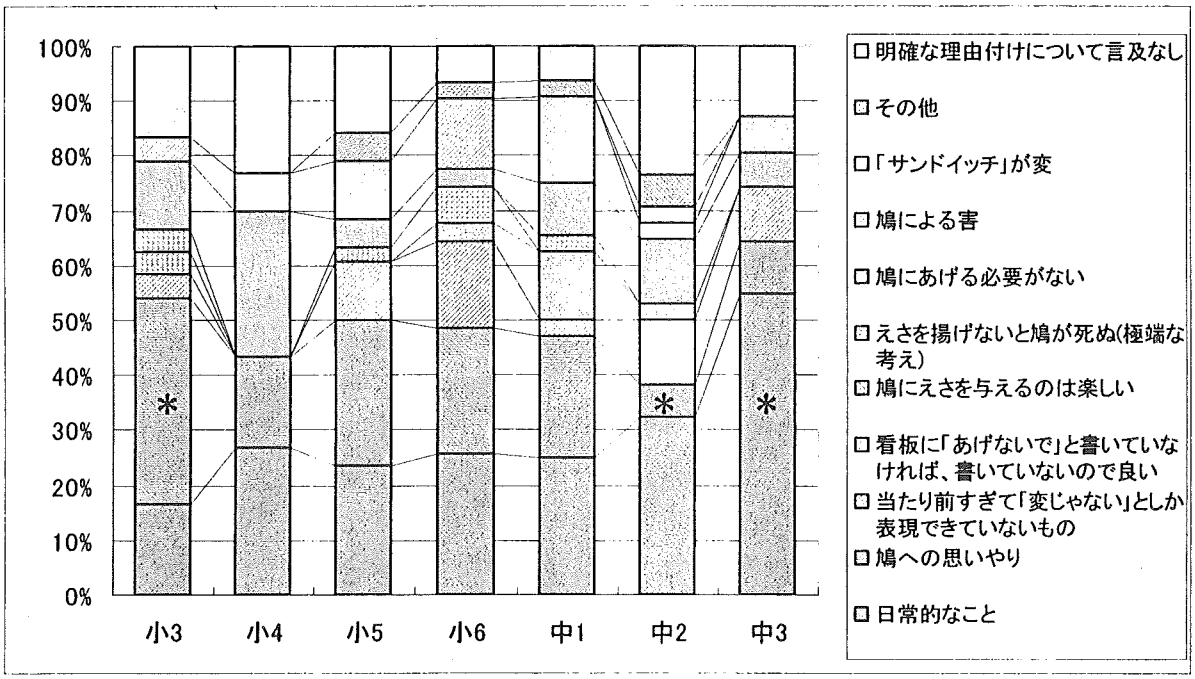
「A:全然、変ではない」と評定した児童・生徒157人に「そう思った理由」を尋ねたところ、最も多かった理由は、「よくあること」「よく見かける」「普通、みんなあげている」といった「日常的なこと」65人(31.1%)であった。次いで、「鳩に優しいことはいいこと」「鳩はえさをもらってうれしい」といった「鳩への思いやり」が43人(20.6%)、「看板に『えさを与えないでください』って書いていなければ」、あるいは、「書いていないので」が6人(2.9%)、「鳩にえさをあげるのは楽しい」

が4人(1.9%)、「えさをあげないとハトが死んでしまう」といった極端な考えが2人(1.0%)であった。また「変じゃないから変じゃない」「変じゃないとしかいえない」といった当たり前のことに対してあえて理由付けすることへの困難を述べている児童・生徒が18人(8.6%)、その他の理由が3人(1.9%)であった。

一方、「B：少し変」「C:かなり変」「D:すごく変」と評定した児童・生徒52人に「そう思った理由」を尋ねたところ、最も多かった回答は「もったいない」「腹が減る」「食べ物を粗末にしている」といったが「鳩にあげる必要がない」が23人(11.0%)で、次いで、「鳩がよってきたら汚い」「ハトの害が問題になっている」といった「鳩による害」に関するものが18人(8.6%)、「普通サンドイッチをあげる人はいない、あげるんだったら食パン」といった「サンドイッチが変」が1人(0.5%)、その他の理由が3人(1.9%)であった。(表3)。

表3：「鳩にサンドイッチをあげる」(平凡な行動)に対する理由付け内容

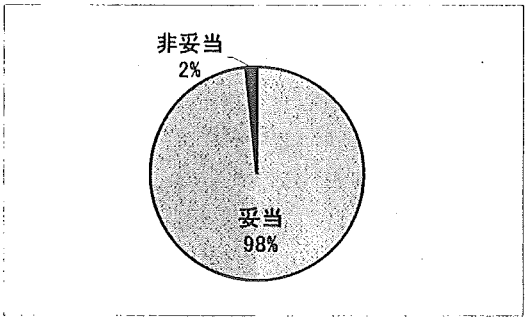
＊；p＜.05



すべての理由付けについて学年別にχ^2検定を行った結果、「日常的なこと」、「鳩への思いやり」に関して人数の偏りが有意であった($\chi^2(6)=12.64$, $p<.05$、$\chi^2(6)=12.63$, $p<.05$)。そこで残差分析を行った結果、「ハトにサンドイッチを与える」という行動に対して、「日常的なこと」という理由で「全然、変じゃない」と評価する児童・生徒は中学3年生に多く、「鳩への思いやり」という理由で「全然、変じゃない」と評価する児童・生徒は小学校3年生に多く、中学校2年生には少ないということが分かった。

明確な理由付けを示さなかった33人を除く176人の理由付けを妥当な内容か、否かで分類した結果を表4に示した。すべての学年においてほとんどの子どもが妥当な理由付けを回答していた。

表4：「鳩にサンドイッチをあげる」(平凡な行動)に対する理由付けの妥当性



②「明らかに異常な」行動に対する評定、ならびに理由付け

次に、「泣いている見ず知らずの赤ちゃんのオムツの中に虫がいるのではないかと考え、衣服を調べる」という明らかに社会的に見て異常な行動についての評定、ならびに理由付けについて検討した。

この行動に対して「A：全然、変じゃない」と評定した児童・生徒は17人(8.1%)、次いで「B：少し変」「C:かなり変」「D:すごく変」と評定した児童・生徒はそれぞれ 48 人(23.0%)、56人(26.8%)、88人(42.1%)、合計 192 人(91.9%)であった(表5)。学年別の数値を表6に示す。

表5：「泣いている見ず知らずの赤ちゃんのオムツの中に虫がいるのではないかと考え、衣服を調べる」(異常な行動)に対する行動評定(全体)

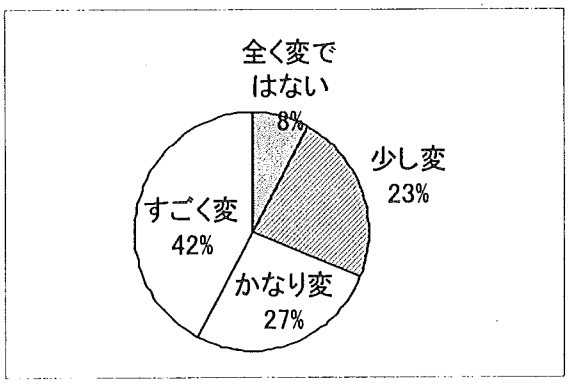
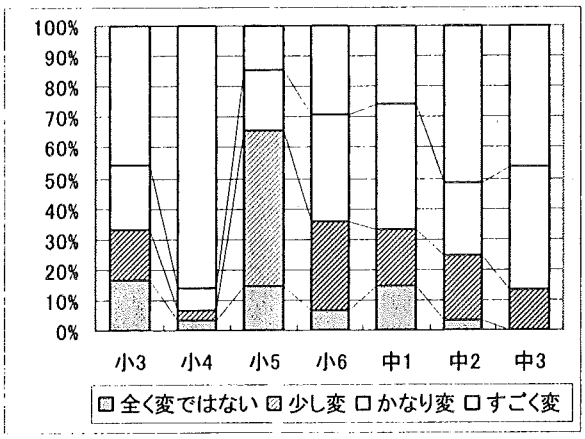


表6：「泣いている見ず知らずの赤ちゃんのオムツの中に虫がいるのではないかと考え、衣服を調べる」(異常な行動)に対する学年別行動評定



「A：全然、変ではない」と評定した児童・生徒17人に「そう思った理由」を尋ねたところ、最も多かった理由は、「赤ちゃんのために調べるのはやさしい人」「赤ちゃんがかわいそうだし、お母さんの時間を取るのは悪いから」といった「親切な行為だから」が 9 人(4.3%)で、「ただ調べているだけ」が 1 人(0.5%)であった。

一方、「B：少し変」「C:かなり変」「D:すごく変」と評定した児童・生徒192人に「そう思った理由」を尋ねたところ、最も多かった回答は「お母さんに誘拐かと思われる」といった他者(お母さん、周囲の人、赤ちゃんなど)の心情に配慮したものが85人(40.7%)、次いで「お母さんに知らせるべき」が 35 人(16.7%)、「他人の赤ちゃんに勝手に触るのはいけない」が32人(15.3%)、「虫がいつもいる訳ではない」といった「他の原因を考慮すべき」といったものが9人(4.3%)、「エロイ」「変態」「気持ち悪い」と本質的な理由付けにはなっていないものの不快な感想を持ったことを述べたものが9人(4.3%)、「虫なんて入らない」としたものが4人(1.9%)、「おせっかい」が2人(1.0%)、「触っていいかお母さんに聞いてからやるべき」が2人(1.0%)、「なんとなく」「わからない」が 21 人(10.0%)であった(表7)。

明確な理由付けを示さなかった25人、ならびに無回答の2人を除く182人の理由付けを妥当な内容か、否かで分類した結果を表8に示した。妥当な回答をした子どもは 164 人(90%)、妥当ではない回答をした子どもは 18 人(10%)であった。

すべての理由付けについて学年別にχ^2検定を行った結果、いずれの理由付けにおいても有意差は見られなかった。しかし「お母さんに知らせるべき」、「他人の赤ちゃんに勝手に触るのはいけない」という理由付けについては、共に回答している児童・生徒が多いことから「とるべき行動基準」としてまとめ、再度、学年別にχ^2検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった($\chi^2(6)=20.23$, $p<.01$)。そこで残差分析を行った結果、「他人の赤ちゃんの衣服を調べる」という行動に対して、「取るべき行動基準」を理由に挙げて

「変である」と評価した児童・生徒は小学校4年生に少なく中学1、3年生に多いことが分かった。

表 7:「泣いている見ず知らずの赤ちゃんのオムツの中に虫がいるのではないかと考え、衣服を調べる」(異常な行動)に対する理由付け

＊；p＜.05

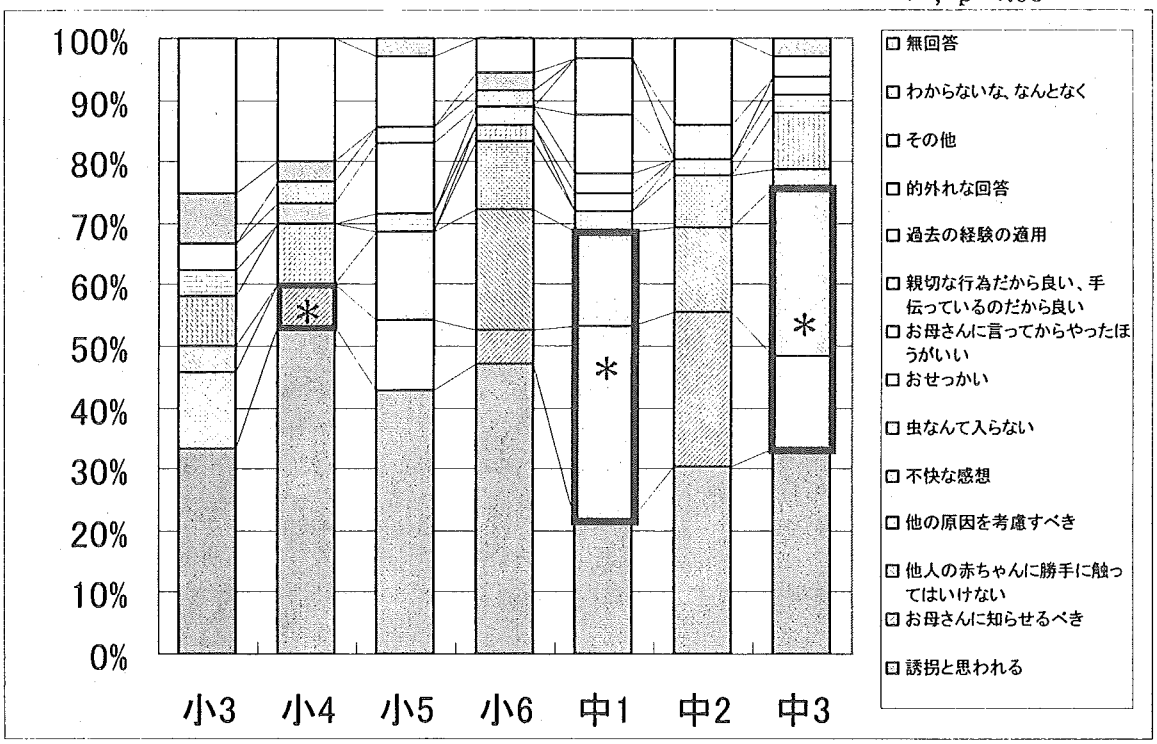
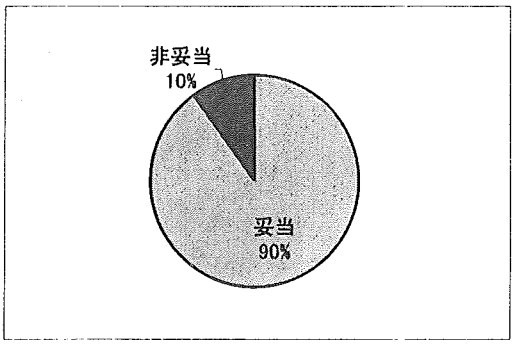


表8:「泣いている見ず知らずの赤ちゃんのオムツの中に虫がいるのではないかと考え、衣服を調べる」(異常な行動)に対する理由付けの妥当性



【考察】

小学校3年生から中学校3年生の通常学級に所属している子どもにおいて、ある行動を社会的に見て「全く、変ではない(奇妙ではない)」、あるいは「変である(奇妙である)」と判断するかについては、判断に多少のばらつきが見られた。しかしその理由付けに関しては文脈にそぐわないような心的、物的状態を述べたものは見られず、社会的にみて了解できる妥当なものであった。今回、実施した健常群の子どもの結果を概観すると、平凡な行動を「全然、変じゃない」と評価した子どもは「日常的なこと」「鳩への思いやり」といった理由付けを挙げ、一方、「変である」と評価した子どもは「鳩による害」を理由に挙げていた。また、異常な行動に対しては、赤ちゃんのためを思ってやった「親切な行為だから」「そう教えられているなら変ではない」といった理由を挙げ「全然、変ではない」と評価した子どもがそれぞれ4%、1.4%認められた。しかし「お母さんに誘拐と思われる」、「他人の赤ちゃんに触ってはいはいけない」「お母さんに知らせるべき」といった「取るべき行動基準」を挙げた子どもが全体の約7割を占め、いずれの行動評定に対する理由付けにおいてもほぼ妥当な内容であったといえるだろ

う。今後は残る3ストーリーに関しても分析を進めていき、さらに同様な結果が得られるか検討したい。

次に、行動評定に際しての理由付けの内容をまとめたところ、その内容に発達的推移が認められた。このことにより、今後、広汎性発達障害児の状況認知、ならびに感情認知の特徴について一般健常群と比較検討することが可能となった。またその際、理由付けが妥当か否かを比較するだけでなく、理由付けにそのものには失敗していない、すなわち妥当な回答をしてはいるものの、発達年齢や知的発達水準と比較して年齢相当な回答内容であるのか、すなわち、対象児の対人状況認知や感情認知の発達程度がどの程度の水準にあるのか、といったことを検討できることとなった。河内ら(2005)がPDD群に本課題を実施したところ、PDD群の理由付けの内容には「過去の経験の中で学習したパターンを硬直的に当てはめた判断」「視点のズレ・的外れな回答」「他者の心情に対する配慮の乏しさ」「文脈に不適当な心的・物的原因の創作」といった特徴が見られた。今後は、行動評定、ならびに理由付けに関して健常群と広汎性発達児群との比較を行い、広汎性発達障害児の状況認知、ならびに感情認知の様相についてさらに詳しく検討を行っていく必要があると考えている。

Happe(1994)は、奇妙な物語テストの中で、自閉症児は物的と評価される理由付けは適切にできる傾向にあるが、一方、心的状態/心理的要素を含む答えをする際には、物語の文脈に全く適切な心的状態の用語を用いたり、意味を本当に理解していないようなことばを用いる、といった失敗、すなわち正確さや適切さに欠ける説明をする傾向にあるということを報告している。この点に関しても、今後、検討をしていく必要があると考えている。

本検査の原版である「社会的常識テスト」は、大学生年齢の高機能自閉症、アスペルガー障害の人たちを対象として開発され、開発時期も約30年前であること、また、当時のアメリカ文化を色濃く反映した場面設定であるなど、原版の日本語訳をそのまま日本の児童・思春期の子ども達に用いることには問題も多い。そこで今後は、不適切な項目を削除・修正し、さらに、広汎性発達障害児が日常で経験する対人関係上の困難な場面をリストアップし、検討することで、日本の子どもの生活・文化に則した新たなストーリーを開発していくことも大きな課題であると考えている。

通常学級に在籍する社会状況認知、ならびに対人関係に関する障害(又は困難)を抱える子どもをスクリーニングするために本調査に先立ち「サリーとアン」課題を実施した。しかし有名なTV番組のキャラクターを使用したため、先入観から深読みしすぎてしまい、判断を誤ったと思われる回答が数人見受けられた。また臨床群に対しては、被験者が口頭回答した内容を検査者が正確に記録する、という個別式で実施している検査を、今回は集団記述式で実施した。比較的、思ったことを文章で表現することができる子どもが多かったが、再質問ができないため、もう一歩踏み込んだ回答が得られず、コーディングに迷う回答もいくつか見受けられた。今後の課題としたい。

謝辞

最後に、本研究の主旨にご賛同いただき、快く調査にご協力くださいました小中学校の児童・生徒の皆さん、ならびに先生方に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

【参考文献】

- Baron-Chohen, S., Targer-Flusberg, H., & Cohen, D. (Eds.):Understanding other minds Perspectives from Autism, Oxforf New York Tokyo, Oxford University Press, 1993(田原俊司監訳：心の理論上・下－自閉症の視点から－, 八千代出版, 1997)
- Baron-Cohhen, S., Leslie, A. M., Frith, U. :Dose the autistic child have a

'theory of mind'?, Cognition, 21, 37-46, 1985

- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., Frith, U.: Mechanical, behavioural and intentional understanding of picture stories in autistic chileden, Btitish Journal of Developmental Pshchology, 4, 113-125, 1986
- Wimmer, H. & Perner J.: Beliefs about beliefs: Representation and Constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception, Cognition, 13, 103-128, 1983
- Happe, F.: The role of age and verbal ability in the theory of mind task performance of subjects with autism, Child Development, 66, 843-855, 1995
- Bowler, D. M.: 'Theory of mind' in Asperger's syndorome, Journal of Child Psychology and Psychiatry, 33, 877-893, 1992
- Happe, F. G. E. : An adovanced test of theory of mind: Understanding of story characters' thoughts and feelings by able autistic, mentally handicapped, and normal children and adults, Journal of Autism and Developmental Disorders, 24, 129-154, 1994
- Frith, U. (Eds.): Autism and Asperger syndorome, Cambridge University Press, 1991(富田真紀訳：自閉症とアスペルガー症候群,東京書籍,1996)
- Sparrevohn, R. &Howie, P. H.: Theory of mind in children with autistic disorder: Evidence of developmental progression and the role of verbal ability, Journal od Child Psychology and Psychiatry, 36, 249-263, 1995
- Perner, J., Frith, U., &Leekam, S. R.: Exploration of the autistic child's theory of mind: knowledge, belief, and communication, Child Development, 60, 689-700, 1989
- Wellman, H. M., Cross, D., Watson, J.: Meta-analysis of theory - of-mind development: the truth about false belief, Child Development, 72(3), 655-684, 2001
- Peterson, C. C., Wellman, H. M.: Steps in theory-of-mind development for children with deafness or autism, Child Development, 76(2), 502-517, 2005
- Baron-Choen, S.: Precurosors to a theory of mind: Understanding attention in others. In A. Whiten (Eds.): Natural theories of mind: Evolution, development and simulation of everyday mindreading, Oxford: Basil Blackwell, 233-251, 1991
- 高木隆郎, M. ラター, E. ショプラー編：自閉症と発達障害研究の進歩・特集心の理論 Vol. 1, 日本文化社, 1997
- Happe, F. : Autism: an introduction to psychological theory, UCL Press, 1994 (石坂好樹, 神尾陽子, 田中浩一郎, 幸田有史訳：自閉症の心の世界－認知心理学からのアプローチ－, 星和書店, 1997)
- 森永陽子, 黛雅子, 柿沼美紀, 紺野道子：TOM 心の理論課題検査法－幼児・児童社会認知発達テスト－, 文教資料協会, 2003

<ストーリーテストⅠ>

公園で

25才の健太は、街の中心にあるオフィスで事務をしていました。昼休みには小さな公園に昼食をもって行き、日当たりのいいベンチにすわって食べます。③健太はよくサンドイッチをちぎって地面にまき、はとにあたえました。

ある日、いつものベンチに行くと、ベンチの側に赤ちゃんをのせたベビーカーがとまっていました。健太は、近くで一人の若いおかあさんが、少し大きな子どもをブランコにのせているのに気がつきました。そのとき、ベビーカーの中の赤ちゃんが泣き出しましたが、ブランコの音のせいでおかあさんには赤ちゃんの声が聞こえません。健太は、おいの赤ちゃんが泣き叫んでいたとき、「おむつの中に虫がいたから泣いているんだよ」、と教えられたことがありました。④公園にいるおかあさんの手をわずらわせるよりも、健太は虫がいないか、すぐに赤ちゃんの衣服をしらべました。

あなたの考えを書いてください

行動	問１：多くの人はこの行動をどう思うと思いますか？	問２：なぜそのように思いましたか？理由をかんたんに書いてください。
③健太はよくサンドイッチをちぎって地面にまき、はとにあたえました。	A ：全然変じゃない B ：ちょっと変 C ：かなり変 D ：すごく変	
④公園にいるおかあさんの手をわずらわせるよりも、健太は虫がいないか、すぐに赤ちゃんの衣服をしらべました。	A ：全然変じゃない B ：ちょっと変 C ：かなり変 D ：すごく変	